

もつなべパーティー！

典型的な木造の安普請なアパート。その一室の前に僕は立っていた。ノックをしても返事はなく、ドアノブに手をかけ回すとガチャリ、と音がなった。

「瑞穂さん、いるんでしょ？」

僕は扉を開け、そういった。しかし返事はない。

仕方なく玄関で靴を脱ぎ、小さなキッチンを抜けると畳敷きの四畳半の室内が見渡せる。その部屋の一角でジーパンに長袖のシャツ一枚というラフな格好の女性がパソコンを前にうんうん唸っていた。これが瑞穂さんだ。

「まったく、いるならちゃんと返事をしてくださいよ」

気づいているのか、いないのか。瑞穂さんはパソコンに見入ったまま、あー、とも、うー、とも判別できない声をあげた。

ふう、と僕はため息をつきキッチンへ戻ると電気ケトルでお湯を沸かす。買ってきたドリップコーヒーは安物の割にいい匂いがするから好きだ。

ふたり分のコーヒーをいれると、瑞穂さんに片方をさしだす。瑞穂さんはそれを無言で受けとると、やっぱり画面に目を向けたまま口につけた。

こうなった瑞穂さんは放っておくより他にない。

僕は覚悟を決めるとコーヒーに口をつけた。

まったく、パズル作家っていう人種はこんな風に変な人ばかりなのだろうか。

瑞穂さんは僕の親戚にあたる人らしい。らしい、というのは母方の従兄弟の義理の父さんの又従姉妹。という複雑な関係のため僕自身よくわかっていないからだ。それでもこうして瑞穂さんの部屋にいくのはわけがある。瑞穂さんという人は放っておいたら三日間もなにも食べないでいる人なのだ。いくら遠縁とはいえ近所で親戚が餓死したなんて目覚めが悪い。だから僕はこうやって学校の帰り道に時々おじゃましているのだ。

「ふう、できた」

満足そうに瑞穂さんが呟いた。今日は一時間か。意外と早かったな。

「新作のパズルですか？」

「ええ。今回は自信作なの」

瑞穂さんは満面の笑顔でそう答える。少し子供っぽいと僕は思った。

小さい頃からパズルが好きだった瑞穂さん。学生時代は休み時間はおろか、授業中も食事中もパズルをしているもんだからパズルジャンキーなんて呼ばれていた、と聞いたことがある。

「今度はどんなパズルなんですか？」

「推理パズル」

「推理パズルって『正直村と嘘つき村』みたいな？」

「そうそう。図形も立体物もない問題文からのみヒントを得るっていう推理要素を含んだパズル。この雑誌から依頼されたのよ」

瑞穂さんが手に取った雑誌には『天才美人パズラー！ 浅川瑞穂パズルシリーズ』と銘打ってあった。

「すごいじゃないですか。雑誌で天才なんて見出しがつくなんて」「うふふ。もつと褒めていいのよ」

瑞穂さんに奥ゆかしさ、というものがあれば顔面通り美人なんだけどなあ、と思っただけでもちろん口にはしなかった。

「それじゃあ僕、天才の力をみせてもらいたいな」

僕はそういつて鞆の中から木製の小箱を取り出した。大きさは両手より少し大きいくらいで、規則的な縞模様が美しい箱だ。

「なあに。これ」

「秘密箱って知ってますか。一定の操作をしないと開かないようになつている小物入れなんですけど」

ふうん、と呟いた瑞穂さんはおもむろに箱を手に取りしげしげと眺める。瑞穂さんが小箱を振るとコツコツと音がした。

「中になにか入っているわね」

「はい。なんでも高名な箱根細工の達人の遺作らしいですよ。その達人の工房からみつかったんですけど、後継者不足で弟子も育たず資料も一切残されていないんだとか。独創的な発想故、今までその箱が開いたことはないそうですよ」

「そんな箱をなんで君が持つてるの?」

僕は少しムツとした。瑞穂さんは僕のことを『君』というのだ。

確かに歳は八歳も違うけど、僕も高校生になったんだし子供扱いはやめてほしい。

「学校近くの古道具屋でみつけたんですよ。結構高かったんですけど」

「ははん。すると君はこの箱を私に開けさせてお宝をせしめようっていうのかしら」

にやりと笑う瑞穂さん。まんまと魂胆を見破られて僕は笑って誤魔化した。

「あはは。でも、興味出ませんか? これくらいのサイズで小物入れつてくると、入っているものはズバリ宝石しかないと思うんですよ」

これには少し自信があった。昔から秘密箱は宝石箱として用いられることが多かったのだ。

「開かない箱つてのには興味あるわね。いいわ。乗ってあげようじゃない」

「そうこなくっちゃ!」

あっさり瑞穂さんが乗ってくれたのが嬉しくて僕はパチリと指を鳴らした。それを合図に瑞穂さんは秘密箱をあちこち弄りはじめた。

「箱の側面の一部がスライドするようになってるのね」

「それが秘密箱を開けるためのスイッチなんです。土産物として売っている秘密箱はスイッチの数も四つと少ないんですが、職人が作ったものになると開けるまでに百を超える動作が必要なものもあるんですよ」

「この箱にはいくつスイッチがあるのかしら?」

「わかりませんよ。だって誰も開けたことがないんですから。やっぱり瑞穂さんでも難しいですか?」

その質問に瑞穂さんは答えなかった。

カチャカチャ、と瑞穂さんが箱の随所にあるスイッチを適当に動作させる。その表情は楽しそうだったけど、どこか鬼気迫るものがあった。まるで僕なんかはじめからいなかっただかのように自分の世

界へ入っていく瑞穂さん。そんな瑞穂さんをみると、ああ、瑞穂さんは本当に天才なのかも思えないと思うてしまう。

「こ、この箱を作った達人ってどんな人だったんだんでしょー!？」
僕はたまらず声を上げた。本当はそんなことどうでもよかったんだけど、瑞穂さんが完全に別の世界へといってしまうのではないか、という不安が突如として襲ってきたのだ。

「私もそれと似たようなことを考えていたわ」
僕の質問からややあつて、瑞穂さんはそう答えた。目線は相変わらず箱の方を向いている。

「似たようなこと？」
「ええ。作者はこの箱にどんな思いを込めたのかわかって」
僕は瑞穂さんのいつていることがわからず、首をかしげてしまった。

「お客さんに大切に使うってほしいって思ったんじゃないですか？」
「この箱を商品として作ったとは限らないでしょ。誰かのプレゼントとかかもしれないし、もしくは自分自身の為に」
いいかけた瑞穂さんは口を開いたまま、ハッと目を見開きそのまま動かなかった。

「どうしたんですか？」
「ああ。そういうこと」
瑞穂さんはなにかにとりつかれたかのように箱のスイッチを力チヤカチャと入れはじめる。その動作の一つ一つに確信のようなものが感じられた。

「どういうことですか？」
僕は聞いた。

「ピースはすべてそろっていったのよ」

「はて？ と首をかしげてしまつ。ジグソーパズルじゃないんだから秘密箱にピースなんてないはずだ。僕がそうやって黙っていると瑞穂さんは続けて口を開いた。

「推理パズルの要領よ。私はね、君との会話の中からピースを貰ったの。この箱の中身についてのね」

「瑞穂さんはこの箱の中身がわかるんですか？」
カチャリ。

瑞穂さんの手元でひときわ大きな音があった。瑞穂さんの手がゆつくりと箱の蓋にかけられる。

「つまり、こういうことだったのよ」
瑞穂さんは箱の蓋を開けると中を僕にみせた。その箱の中には

……なにも入っていないかった。

「そ、そんな。箱を開ける前は確かに音がしていたじゃないですか!？」
僕にはなにが起きたのかさっぱりわからず、大声を出してしまつた。

「順序よく説明するわね」
瑞穂さんは楽しそうにそういった。

「私はね、この箱の中になが入っているのかわかって考えたの」
「そんなの開けてみないとわからないじゃないですか」

まさか瑞穂さんはエスパーなんじゃないだろうか、なんてことを考えてしまつ。

「そうかしら。君はいったよね。高名な箱根細工の達人の遺作で、

その工房の倉庫からみつかった品って」

「確かにいいましたけど……」

「それならこの箱の中身は宝石じゃないわよね。だって工房からみつかった遺作ってことは、他人の手に渡らなかつたってことでしょ。達人自ら使っていたとしたら貴重品を保管するのに工房はないし、なにより宝石なんて高価なものを保管するのに、振れば音がなるくらい空間を空けるはずないわよね」

「そ、それでも音はなつたじゃないですか。中になにか入っている証拠でしょう」

「確かにその通りよ。でもね、私はその中に入っているもの自体が一つのスイッチなんじゃないかと考えたのよ」

いいながら瑞穂さんは箱の底面を指さした。

「おそらくここに球体状のスイッチがあるんでしょうね。最近の携帯ゲームに傾きを使ったパズルなんてよくあるわ。この箱も同じように、箱自体を動かすと傾きによって球体が転がりスイッチが入る仕組みになっているのよ。振ったときになつた音は球体がぶつかる音ね。作者の思いを見事に叶えている、いい作品だわ」

「作者の思いを叶えているって、どついうことですか？」

「君は後継者不足で弟子も育たず、資料も一切残されていないっていったわよね。たぶん作者はこの箱を使って技術を残そうとしたんじゃないかしら。それならこの箱は存在しているだけで作者の思いを叶えているってことにならない？」

瑞穂さんの説明に、僕はぐうの音も出なかつた。

天才と達人。そういつた物事の極致に達した人じゃないと分かり合えない世界なんてものがあるのかもしれない。

「と、まあ、一通り説明が終わったところで、私お腹すいちゃったんだけど」

瑞穂さんは先ほどの表情とはうつつかわつて、てへへと笑いながら僕をみた。

やれやれ。瑞穂さんにはかなわない。僕が名前で呼んで貰えるようになるのはいつのことになるのだろう。

「簡単なものでよければ作りますよ。なにがいいですか？」

「えつとね。ハンバーグ」

瑞穂さんの元気な声を聞いて、僕は複雑な思いになつてしまつた。

瑞穂さんに子供扱いされるのはやっぱりどこか納得がいかないのだ。

12 霧雨の歌

フルワイト

「しとしと」という音はとても静かで、ややもすれば聞こえなくなつてしまう。例えばペチャクチャとうるさい学生がたつた二人通りかかっただけで、「しとしと」は無音に変わつてしまう。キィコキィコと音をたてる自転車が走り抜けるだけで、「しとしと」は声をひそめてしまう。周りが全て静かで、しかもその場に聴いてくれる生き物が存在する時、初めて「しとしと」は音になるのだ。男はそういう雨に濡れるのが大好きだった。

口ウソクの燃える音よりも静かなパーカッションを、息を潜めて

路傍に丸まり拾った紺色のコートにくるまってじっと聞く。浮浪者としての霧雨の楽しみ方は、おそらくどんな王侯貴族でさえ真似の出来ない、心落ち着く風雅さがあった。

この日は公園の、いつもなら子ども達でいっぱいジャングルジムのでっぺんでコートにくるまっていた。足を絡ませている鉄の棒は青のペンキがはげかけている。握りしめていた手を鼻先に持ってきて広げると、不思議となつかしい、錆びた鉄の匂いがした。思わず顔の前でキュッと手を握ってしまう。それからゆっくりと拳を開いて、元のところを握り直した。

彼にもジャングルジムのでっぺんを争った時代はあった。危ないからよしなさいと母が止めるのも聞かず、おてんばな姉と一緒に他の子の間をすり抜けて一番上に手放して立つのは、とても、とても面白く楽しかった。

全く楽しくなくなったのは、ジャングルジムだけではない、他のどの遊具も全く楽しくなくなったのは、姉と一緒に遊んでくれなくなっただけからだ。もちろん、一番嫌いになったのは、ジャングルジム。

それから三十年以上の月日が過ぎている。男はもう、ジャングルジムを毛嫌いしてはいない。てっぺんを独占する喜びも戻って来た。それでも、手放して立ち上がることは、大人げないからという理由ではなく、出来なかった。だからこうして足を絡めて、しっかりと鉄の棒を握りしめて、ときどき片手だけ離してコートの前をかき合わせて、霧雨の音を聞くだけにしていた。

しと、しと……

バチャッ！ バチャッ！

静かでもろい雨の演奏は、繊細さのかけらもない音で中断されて

しまった。うとましい。憂鬱に首を曲げると、すぐそばの高校の夏服を着た女の子が一人、水たまりを乱暴に蹴り上げていた。傘を差していない。水色のシャツが雨にぬれて、すらっとした体のラインを引き立てていた。

うつむいていて、男が上から見ていることなど気付いてもないようだ。また一つ、盛大に水しぶきを跳ねさせると、ジャングルジムの一番下の棒に腰掛けた。ぶつぶつと何かに文句を言っている。雨の音を聞こうという気は全くないようだ。

「少女、家に帰り体を乾かせ」男が体を動かさずに話しかけると、少女は飛び上がるようにして立ち上がり、きよろきよると辺りを見回した。「上だ」

首をあげた少女は驚いた顔をしていたが、すぐにその可愛い顔をふくれっ面に変えた。「えらそうに口出しすんなよ。関係ないだろ、ホームレスのくせに」

男はゆっくりと首を振った。「関係はある。お前の出す音がうるさくて、雨の演奏が聞こえないんだ」

「雨の演奏？ おっさんどつかおかしんじゃない？」少女は馬鹿にしたように笑ったが、それでもそおとジャングルジムの下の棒に座って、それきり黙ってくれた。

しと、しと……

「へえ、霧雨でも音があるんだ」少女が意外だと言つような声を出したのはしばらく経ってからだ。「静かできれい」

男がぶつと息を吐いた。顔に掛かった前髪からしずくが飛んだ。

「……ああ」

「おっさん、良い趣味してんね」

少しだけ尊敬したような口調に、男はかすれた笑い声を上げた。「浮浪者をほめてどうする」

少女もほんのちよつと笑った。「だよね」

しばらく二人とも、霧雨の静かな音色を聴いた。男がコートをかき合わせる時の衣ずれの音すら耳にさわり、少女はキツと男を見上げた。彼は手を振って謝り、それから少し寒くても我慢することにした。

近くの道が通る音がやけに大きく響き、猫の鳴き声がミャーオと消えていった。風が木の葉をゆらして柔らかい音をたてる。子どもが何人が、雨に悲鳴を上げながら自分の家へと走って行く。

今度は男が少女に話しかけた。「家に、帰らないのか？」視線はランドセルを頭にかかげる子ども達に向けられていた。

「帰りたくない」彼女の視線も、はしゃぐ子ども達だった。「お母さんがうるさいから」

「うるさいお母さんのそばはイヤで、怪しげな浮浪者のそばならいいの」

「おっさんは怪しくないし」

「どうしてそう言える？」

「ずっと前からちよこちよこ見かけるもん」

少女の答えに、男はまたかすれた声で笑った。「素直だな、少女」「うん。素直すぎるって……」そこで切られた彼女の言葉は、とても寂しげだった。「ねえ、素直っていけないこと？」

男は少女を見た。ジャングルジムの下に座っている彼女の丸めた背中が、言葉と同じく寂しい印象を放っていた。近寄って肩を抱いてやりたくなかったが、自分にその権利が無いことはよくわかってい

る。だから代わりに「素直。そつだな、素直な方がいい。俺みたいになりたくなければな」と、出来るだけ親身な声で言った。

少女がくるつと首を回して、問いかけるような目で男を見た。男はしっかりと鉄の棒を握りしめ、水から上がった犬のように頭を振った。しつとりとぬれたぼさぼさの髪から水滴が跳ね飛ぶ。少女は軽く悲鳴を上げてジャングルジムから離れた。

「ふうつ。少女、なんでここに来たんだ？」にらみつける目を無視して問いかけると、彼女は男の振る舞いのしりながらジャングルジムを登り始めた。すらりとした腕がしなやかに動き、靴の下でぬれた鉄の棒がキュツと音をたてる。てっぺんの一つ下の段まで素早く登ると、何でもないように鉄の棒に足を掛けて立ち上がった。「あたしね、ジャングルジムって昔から大好きだった。公園にあるものの中で、一番高いところまで行けるから。今日家飛び出したらさ、なんか急に来なくなっちゃってさあ」いつの間にか、さつきまで立っていたところに腰掛けている。「あたし、小さい頃は『ジャングルジムのぬし』って弟に呼ばせてたのよ。本当、大好きだった」そしてまた立ち上がると、とことと男のまわりを歩いて回った。そんな彼女を見ているうちに、男の口を「危ないからよしなさい」という言葉がついて出た。

少女は目を丸くした。「お母さんみたいな言い方。なに、心配してくれてんの？『ジャングルジムのぬし』は絶対に落ちないんだから、軽くジャンプしてからかう。と、ぬれたジャングルジムがすべって、彼女はわずかにバランスを崩した。

「危ない！」

気付くと少女の手首は、男の骨ばった手に包まれていた。やめて

くれ、と男が緊張した声を出す。その真面目な瞳を見た彼女は、今度は何も言わず腰を下ろした。

男がすつと微笑む。「素直だな」

「素直な方がいいんですよ」少女はぶらぶらと足を揺らし始めた。

「あの、もう手、放してもいいよ」

「おっと、すまん」

「おっさんは？　なんでここにいの？」少女とほとんど同じかな。昔はジャングルジムが大好きだった。男は少しためらった。少女がその隙に言葉を挟む。

『少女』って呼ぶのやめてよ、おっさん

しかし男は聞こえなかったかのよつに言葉を継ぎ始めた。「昔と言つても、もう三十何年になるよ。俺には姉さんがいてな。今思い出せば、俺のことを思ってくれているいい姉さんだった」

「あのー、おっさん？」

「二人で公園に遊びに行くとな、他の子がたくさん遊んでるんだよ。ジャングルジムなんかそれこそ大人気でさ。その頃流行ってたのが」男は握っていた棒をとんとんと叩いた。少女は意外にも、男の話にのめり込んでいた。「てっぺんに手放して立つことだった。結構怖かった。でもな、姉さんが励ましてくれて、一緒に手を握ってくれて、それでてっぺんに立てるようになった。最高に楽しかったよ」突然男の声が消えた。引き込まれていた少女は無邪気な声で「それで？」と訊いた。しかし、男は黙り込んだまま、鉄の棒をギュッと握りしめるだけ。

しと、しと……

「姉さんがどうやって俺を励ましてくれたと思う？」しばらく霧雨

を聴いてから男が出した声は、寒いのか、少し震えていた。『ねえちゃんはジャングルジムのたつじんなんだから！』そう言っていたよ。『ジャングルジムのたつじんについてくれれば大丈夫！』ってな。母さんのやめろって声なんか、全く聞こえていなかった

少女は思わず吹き出した。「あたしみたい。あたしはぬし、お姉さんはたつじん。ねえ、どっちの方が上手なのかな？」はしゃぐ少女を、男はじつと見つめていた。なんとなく居心地が悪くなって、少女は楽しげに上げていた声を抑えた。

男がぶつと前髪についたしずくを払つ。「たつじんもぬしも、同じくらい上手いと思うがな」男は雨を降らせている青っぽい灰色の雲を、目を細めて見上げた。「少女、家に帰り体を乾かせ。俺みたいになりたくなければ、ジャングルジムのてっぺんに立つのはよした方がいい」

少女は、ふいに男の言いたいことが分かった。こくんとうなずくと、ジャングルジムの一段一段、ゆっくりと踏みしめて下りていく。そして地面に足がついた時、「素直でしょ？」と男に向かって笑いかけた。

「ああ、素直だ。素直な子はかわいい」男も彼女に向かって微笑み、うなずいてみせた。

くるりときびすを返して歩き去る少女の背中を、男はゆっくりと見つめていた。

しと……しと……

男が天に目を向けると、雲は少しずつ白さを取り戻しているようだった。霧雨の歌がもつそろそろ終わってしまっただ。男はギュッと鉄の棒を握りしめると、紺色のコートの前をかき寄せた。

フクロウ

「僕は主人公だから」

現実にこんな台詞を本気で吐ける人間を俺は知らない。だって恥ずかしいだろ？

それなのにここは舞台でもロケ現場でも何でも無い上に目の前のコイツは役者でもない。なのに真顔で真剣に言ってるのけたんだ。そりゃあもうどうリアクションを返したらいいかなんて分からない。笑うか？ 逃げるか？ それともつつこむべきか？

なんかどれも正解しているようで、違う気がする。そこら辺の通行人、もしくは見知らぬ誰か、はたまた時代に名を残す偉大な御方、誰でもいい。俺に教えてくれ。

なんで俺がそれを真正面から言われたのかと言えば、なんてことはない。ただ疑問に思ったことを聞いてみただけだったんだ。

ソイツはなぜかいつも楽しそうで、何が起ころうが、何をしようがお構いなしに全てを楽しんでいた。端から見て楽しそうと思えることなら、別にいい。楽しいんだから。けどイヤなことや不幸と思えることすら楽しく笑っているのだ。

普通そんな目に遭ったら悔しいとか、悲しいとかあるだろうに。だけどソイツは至って普通の笑顔で「まいつちゃったよ」と言っていて終わらせるのだ。

ここまでくると余程の馬鹿か奇人変人と思えないだろ？
だが前者はない。

だってソイツは学年でも五本の指に入るほどの成績保持者なのだから、間違っても馬鹿であるはずがない。……いや、「馬鹿とハサミは使いよう」なんて格言もあるくらいだから、一概にそうとも言えないのか？

ともかく、ソイツは大真面目に自分のことを「主人公」と言い放つ、結局は後者の奇人変人の変わり者だったんだ。

どうしてここまで変わり者だつて分かっているのに関わったのか、だつて？

そりゃあ、聞いた後に気付いたんだからしょうがない。

俺だつてここまで変わり者だつて分かっていたなら君子危つきに近寄らずつてわけで遠巻きにしていただろう。いや、俺の中で間違いない「少年A」にカテゴライズしていた。

しかし既に聞いてしまった後、もう取り返しは付かないのは必定。ならここは己の好奇心を満たすだけに留まり、あとは適当にやり過ごして関係を断つに限るってもんだ。

ってわけで、俺はさっさとこの綱渡りのような危うい時間と空間を終わらせることにした。

「うん分かった。ありがとう。聞いたかったのはそれだけなんだ」
まるつきり棒読みの台詞を言い、回れ右。初めの一步。二歩目でダッシュ。と決めていた。その時、

「じゃあまた明日」

なんてこと言ってくれたんだ。

イヤな予感は嬉しくもないのによく当たる。できれば宝くじの一等が当たつて欲しいものだ。それなら幸せなんだが。

なんて淡い思いも空しくソイツは俺に気安く話しかけてきた。

「おっはよー！！ 今日も爽やかな朝だねっ」

俺とは「0」を境界面にして、「+」にテンションが高いソイツは、朝のためにテンションが「-」の俺にとってはうざかった。これ以上ないってくらいウザイ。

何が「今日も爽やかな朝だね」だ。こちとらまだまだ寝たりなくて、毎日朝もはよから昇る太陽が憎いくらいだ。ハッキリ言っつてそれと同じくらい迷惑だっつてというのが分からのかね。

「……オッス」

できるだけ関わりたくなかった俺はテキストに挨拶をして、気怠い足取りで学校へ向かう。テンションMAXの奴ならそのまま猫まつしぐらな勢いで学校へ向かってくれると思っただからだ。

なのに、

「昨日はあんまり話せなかつたね」

歩調を合わせて話しかけて来やがった。

「……なんで一緒に歩いてるんだ？ 自称『主人公』さんは」

俺よりも背の低い奴を見下ろして言っつ。見下した感じにと、多少の演出があつたが、それなりの効果を期待した。

「やだなあ、僕の名前は鈴木大助だよ。同じクラスなのに忘れちゃつた？」

困つたような、しかし今にも「エヘッ」なんて笑い声がしそうな笑みを浮かべる。

効果無し。暖簾に腕押しだったか。

「自称『主人公』のクセにずいぶん平凡な名前だな」

「あはははっ、よく言われるよ」

何笑つてるんだよ。

「それに自称『主人公』はやめて。正真正銘僕は主人公なんだから仁王立ちで胸を張る。その堂々たるや、全身で『主人公』を示している。

「だから何なんだよ、その主人公って……」

ノリについて行けない俺は頭を抱えるしかない。もういいから先に学校へ行つてくれ、頼むから。

切実に悩む俺なんぞ眼中にないのか、ソイツ 自称『主人公』

鈴木大助は目を輝かせている。

「何っつて、そりゃあ勿論僕は僕だけの主人公に決まってるじゃないかっ！」

他の生徒や出勤するサラリーマン達が行き交う歩道のど真ん中で力説する鈴木。

なもんだから、衆目が集まる っつて俺も一緒かよ！？

注目の中心人物の隣にいるのだから、当たり前と言えば当たり前しかし俺はそんな注目になりたくない。何処を見渡しても足を止めた奇異の眼差しが俺たちを見ている。そんな目で俺を見ないでくれ！

俺は嫌な脂汗を掻きながら、鈴木に気取られないよう、そうつと、そうつと静かに離れる。

が。

「何処行くんだい？ マイブラザー」

肩を鷲掴みにされ、信じられない呼び方をされた。同時に周囲の人らは一歩後退 というよりもドン引きじゃないか。

「誤解を招くような呼び方すんなあぁぁぁ！」

「落ち着いて落ち着いて。それに先にフラグを立てたの君の方だし」

「……フラグって何だよ」

何の専門用語なんだよ。

「しょうがないなあ。よし、それじゃあ説明しよう」

頼んでないし。

「いいかい？ 耳をかつぽじってよあく聞くんだ。そもそもフラグとは」

鈴木は頼んでもないのに説明を始めた。

それは奇つ怪な内容で、何が何だかよく分からんことばかりだったが、掻い摘んでみると、漫画やゲーム、アニメなどに用いられる、重要な行動や言動が後に生かされることを指すとか何とか……あったか？

演説のように堂々と、身振り手振りを使い、狭い歩道に次第に人の輪が大きくなっていく。鈴木も鈴木でどんどん熱弁になり、最後の方では汗を滾らせ拳を天へ突き出している始末だった。

無論、俺はその状況について行けず、脳みそが良い感じに麻痺し始めていて、ハツとして気が付くと周囲から大喝采が鳴り響いていた。

「いやあ、気持ちいいもんだね」

本気で嬉しいんだろう、顔の筋肉が緩みつぱなしだ。

「……この状況でその台詞はないな」

現実、俺たちは大遅刻した。鈴木は演説が長すぎた所為で、気が付くと朝のホームルームは終わり、一時間目が折り返しの時間となっていた。当然お説教は後回しで廊下に立たされている。バケツが

ないのが幸いだが。

それよりなにより、

「なんなんだ、この状況は……」

本気で頭痛がしてきたぞ。

廊下には俺たち二人だけではない。多くの生徒が廊下に立たされていた。ヒドイ所なんて十人以上が立たされているクラスもある。

「この階だけじゃないんだろうな」

演説に聴き入っていた民衆の中にはこの学校の生徒が数多くいた。同じ制服を着ているのだ、それくらいは分かる。恐らく今頃お説教を上司から受けている平のサラリーマンもどこかにいるんだろう。

そう思うと、何か色々と通り越して、コイツが凄く奴に思えてきた。あれだけの人の心を惹き付けたんだ。すごいと思わざるおえない。

「お前つて凄く奴だな」

「それほどでもないさあ」

遅刻の罰で廊下に立たされているのに、ニヤけまくった顔には反省の色が全くない。むしろ楽しんでないか？

「お前さあ、何がそんなに楽しいわけ？」

「昨日と同じ質問だよな？」

「まあな。それと『主人公だから』ってのは無しな。あれ意味分かんねえし」

すると鈴木は、あははは……まいったな、と頭を掻いた。

「主人公っていうのは『僕の人生』の主人公ってこと」

「人生え？」

「そ。僕の人生は僕だけの、僕を中心として時が動く。だから僕は

『鈴木大助の人生』ってドラマの主人公ってことなんだ」

「人生ドラマ……」

それってドキュメンタリードラマのことか？

「それって楽しいのか？」

「楽しいよ。見るのは僕だけだけど、いざ振り返ってみて面白くないことしか思い出せなかったら悲しいじゃない。だから僕は楽しいことしかないんだ。振り返ると笑顔がいっぱい僕がいるって嬉しいよね」

廊下の窓の向こう側。外の更に向こうを見つめる鈴木。今まさに振り返っているんだろう。楽しい時に身を置く自分を。

「……人生楽しんじゃってるんだな。羨ましいよ、正直」

家に帰れば親が勉強しろとか五月蠅くて、堪らなく面白くない。

けど、コイツのようになってるんでも楽しいと思えたら、きつと……。

「君はとづくにやってるでしょ？ 自分ドラマの主人公」

「俺が？ いつ？」

いつそんな奇行に奔ってたんだ？

「ドラマは自分が生まれた瞬間からカメラが回ってるんだよ」

ビデオカメラを持っているような手つきで、見えないレンズを俺に向けた。

「クサイ台詞だな」

軽く笑ってやる。

「それが僕の持ち味なんだよ」

ニツと白い歯を見せて笑った。

あいつは人生を楽しむ術を知っている。

なんでも楽しいことに変える感性を持っている。

けど俺はあいつほどの達観した達人的領域には辿り着けない。

だってこの性格はもう変えられないしな。だから俺は俺だけのドラマって奴を再スタートさせることにした。

急に変わったらみんな驚くだろうか。それとも以前の俺みたく引くだろうか。

それも一興。

まずはそんな所から楽しんでみようと思ってる。

というわけで。

「オッス！ おはようさん！」

教室に入って速攻大声で挨拶してみた。

やっぱりというか、みんな一気に静まって目を丸くしていた。驚く方だったか。

その中で一人こちらを見てニヤニヤしている最初の奇人変人達人がいた。

まだまだ、だね。

あからさまに目がそう言っていた。

だから俺も仕返しに、

ほっとけよ。

節合 合掌

葬式である。

広い畳敷きの和室に木魚の音と、朗々たる僧侶の読経が響いている。座して読経を聞く参列者は、一人の例外も無く、頭を垂れ肩を揺らしている。

一人の例外も無く、だ。

故人はどれほど偉大な人物だったのであろう。数百人の参列者が、皆悲しみに咽び頭を垂れ、肩を揺らしてむせび泣くほどの大人物であつたのだろうか。

いや、おかしい。この部屋には読経と木魚の音以外、何も聞こえない。故人との別れを悲しみ、嗚咽を堪える音も、しゃくり上げる音も聞こえない。

それは明らかに異様な光景であつた。

何が異様であるか。

それは、頭を垂れて肩を揺らす参列者の顔が、明らかに葬式の表情ではない。誰一人、例外無く、皆、必死に笑いを堪えているではないか。

今、この瞬間ならばきつと、箸が落ちるだけでも大爆笑が巻き起こる。そんな脆く、危うい空気に包まれていた。

参列者は何がそんなにおかしいのであろうか。

参列者に不審な点は見当たらない。僧侶達は一心不乱に供養に励んでいる。故人は生前漫才師ではあつたが、死してなお笑いを与え続けることは難しい。神の子ですら復活に三日もかかったのだから。

もう一度、良く耳を澄ませてみよう。すると、答えは自ずと見えってくる。

「ぼく、ぼく、ぼく、ちーん！」

ああ、木魚だ。

いや、木魚ではない。人の声だ。

お経をあげる僧侶の隣に座る、いかにも徳の高そうな老僧侶が奇妙な動きをしながら、木魚の代わりに声を発している。

「ぼく、ぼく、ぼく」と身体を左右に振りながら呟き、「ちーん！」

と言うと同時に参列者の方を振り向く。

ああ、やめてくれ。こつち見んな！

故人は、一世を風靡した漫才師であつた。日本のお茶の間に遍く笑いを届け、「名人」だとか「達人」だとか呼ばれていた。

しかし、故人は「葬儀屋」と呼ばれる事を好んだ。故人の一番得意とするネタが、「三途の川を渡っちまったじゃねえか！」という葬式ネタであつたからだ。

しかし、七十の誕生日の翌日に急逝した。死因は心臓発作だった。

他界した直後に弁護士が故人の遺書を持って来た。

遺書には自分の財産とその相続についての細々としたこと、弟子達への励まし、忙しくほったらかしにしていた子供達への謝罪、妻への感謝が記された後に、自分の葬儀についての注文が書かれていた。

曰く「通夜は不要。死亡したその日のうちに葬儀を執り行つべし」「葬儀の際は幻覚寺の耄碌和尚に一切を任せるべし」

……そして、この木魚の物まねをし、葬儀場のある種の地獄へと変えている老人こそが、幻覚寺の耄碌和尚である。

耄碌和尚は、その名の通りモウロクして久しい。昔は宗派や宗教の壁を越え、世界平和のための活動をしていたが、今では見る影も無い。本人の頭のなかには至って平和であるようだが。

「ちーん！」

一際大きな鐘の音が響き渡り、読経を上げていた壮年の僧侶が参列者の方を向く。

「……それでは、故人の遺言にのっとり、耄碌和尚よりお言葉を頂きます」

その瞬間、座敷に戦慄が走る。

頼む、何事も無く終わってくれ……と誰もがそう願った。

耄碌和尚にマイクが手渡され、和尚はぶるぶると震える手でマイクをゆっくりと口に近づける。

「残念さん、飯は……まだかね？」

一瞬、プツ……と言う破裂音が聞こえるが、なんとか誰も吹き出さずに済んだらしい。

しかし、耄碌和尚は追撃の手を緩めない。

裏声で、こう続けた。

「おじいちゃん、さつきゴハンは食べたでしょ」

まず、故人の妻が立ち上がった。

口元を押さえて部屋を出て行く。

そして、襖が閉じられたと同時に「アツハツハツハ」という豪快な笑い声が聞こえてきた。

ああ、だめだ。もう耐えられない。

そう、だれもが思い、諦めかけた瞬間に祭壇からガタリと音がした。

下を向いていた参列者が皆、顔を上げ祭壇を見つめる。

するとどうだろう。

棺桶が開き、葬式ネタの達人である故人が、まるで往年の舞台と同じように、頭に三角巾をつけて起き上がっているではないか。

言葉を失う参列者。

達人は、青白い顔のまま耄碌和尚の方を向き、

「このモウロクジジイ！ うっかり三途の川を渡り直しちまったじゃないか！」

と、往年の名作ネタを披露し、またバタリと倒れた。

参列者は目を見開き、呆としている。未だ何が起こったのか把握できていない様子。

「あつひやつひやつひやつひゃ。あんたあ、テレビでみるのとおんなじじゃー」

座敷には耄碌和尚の笑い声だけが響き渡る。

一瞬のあと、誰かが部屋から駆け出して行った。それから、連鎖的に参列者が部屋から逃げ出して行った。

阿鼻叫喚の地獄絵図。

そんな中、いつの間にか耄碌和尚が祭壇に寄り、手を合わせていた。

「ごころうさん。ありがとう」

そして、鐘を鳴らした。

チーンと、澄んだ音が響き、故人の遺影が少し微笑んだように見えた。

15 突き抜けるぼんぼり

フアントン

じゃき、と鉄が鳴った。

細かくなつた葉の残骸が、枝の間を抜けて下へと落ちて行った。夏の盛りの熱気に混じり、青臭さがむわつと立ち昇る。身を切られることへのささやかな抵抗だろうか、と少年は幾分ませたことを考えた。誰だつて切られたくて大きくなっている訳じゃないもん。

暑かった。あたりには油蝉の大合唱が響き渡っていた。ぶかぶかの麦わら帽子をかぶり、首から手拭いをぶら下げた格好で、少年は高い脚立の上に危なっかしく立っていた。袖なしのシャツから伸びた日に焼けた細腕にはびっしりと汗の玉が浮かび、半ズボンから下、まだ華奢な膝小僧や脛のあたりにはびっしりと細かな葉の破片が貼り付いていた。

じゃき、とまた鉄が鳴る。明らかに身に余る大きさの鉄を、少年は手馴れた手つきで規則的に動かしていく。トラマサと呼ばれる黄色い斑の入ったマサキの生け垣が、頭を刈られて綺麗に平たくなつていく。時折少年は身を沈め、目をすがめて、水平に刈れているかどうかの出来を確かめた。それは師匠の姿を真似ている内に自然と

身についた仕草だった。

『まず天辺を刈り込むんだ』

祖父は穏やかな微笑みを浮かべながら手ほどきをしてくれた。

『前に刈った跡があるから、そこに合わせるんだ。なるべく地面と平行に、水平になるようにな。それから側面を刈る。今度は地面と垂直に刈るわけだが、これが案外、難しい。本当に綺麗にやるんならミチイトを張る』

『ミチイト？』

『糸さあ。こつ、両脇に竿を立ててな、そこに糸を張ってな。それに沿って刈っていけばまっすぐだ。そのうちに木そのものが大きくなってくるで、何年かに一度は本格的にやらなきゃならん』

今日は糸を張ってないよ、じいちゃん。いいよな。急いでやりたいんだ。

埃にまみれた軍手で鼻の頭の汗をぬぐうと、そこからも緑の匂いがした。

少年は重い鉄を身体全体で操るようにして、刃の届く範囲の枝を、葉を切り取った。脚立の天板の上で伸び上がるようにして作業に没頭する様子は危なっかしいことの上なかつたが、制止の声を上げる通行人はいなかった。いかに暇であるうと、外を出歩くにはいささか暑すぎる時間帯だったからだ。今の立ち位置から届く範囲を刈れるだけ刈ってしまうと、鉄を生け垣の上に残し、アルミ製の脚立の段を半ばから飛び降りて必要な分だけ横にずらす。そしてまた猿のごとき身軽さで駆け上がり、じゃきじゃきと軽快な音を立てて形を整えていく。師匠の仕込みが余程良かったのか、この少年の動きに迷いや停滞はほとんどない。どこまでも高く抜けるような青空と

凶悪なまでの陽光の下、少年の仕事はどんどん進んでいった。

じいちゃんは凄いな、と少年は鋏を操りながら嘆息していた。前に刈った跡というのが、掛け値なく本当に水平だったからだ。

少年の祖父は、庭木に関して豊富な知識と経験を持っていた。職人顔負けの剪定作業の他にも、様々な植物のちよつとした病気の兆候などをすぐに見抜き、適切な処置を施すことができた。庭先を掘り返し、水はけの具合を調節し、造り上げた花壇にはそれぞれの季節の草花を植えつけて彩らせ、自前で組み上げたビニルハウスの中で蘭までも育てていた。

暑い日も寒い日も、にこにこ微笑みながら土をいじる姿を少年は思い浮かべた。本当に楽しくやってるんだな、と幼心に思ったものだ。そんな祖父だから、庭いじりを趣味とする近所の奥さん連中にも頼りにされていた。祖父の中にある引き出しの数は想像をはるかに超えて多く、尋ねられて答えられないことなど少年の記憶にはなかった。隣の家のピオラの花壇やアイリスの寄せ植え、向かいの家のユズリハやゴールドクレストの木、果ては神社の松の木にまで祖父の手は入っていた。道楽者と自らを称して決して恩着せがましいところのない祖父は、この界限で土をいじり庭木を愛でる人達にとつてはちよつとしたヒーローだった。それが少年にとってはすごく誇らしいことだった。

『枝を落とす時には、刃の根元の方で切るんだな。焦つてまとめて切ろうとすると雑になるで。慌てんでいいでの、刃の使い方をまず覚えなや』

祖父の教えの通りに、焦らずに。けれどもたつかないように手早く。

切りそろえた木の、幹に近いところを握って揺らしてなるべく葉クズは落とす。もし病気などで痛み始めている枝があったら迷わず落とす。樹液で刃の切れが鈍ればあらかじめ用意したバケツの水でさつと洗う。使い終わったら砥いでやるう、と少年は考えていた。砥ぎ方はまだちゃんと習つてはいなかったが、見よう見まねでやれる自信はあった。それで良くないところがあつたらまた聞けばいいのだ。

そう、また聞けばいいんだ。まずはこの生け垣を綺麗にするんだ。

蝉の声が一層増したような気がした。

飛行機雲が太陽に向かって一直線、青空を真っ二つに割っていくのが見えた。汗を拭きながら、少年はしばらくその行く手を見守つた。いつかあれに乗りたくない、と思った。やがてそれに飽きると、少年は再び鋏を握り締めて不ぞろいなままの生け垣の横腹に取り掛かった。

『木は好きか、ぼん』

祖父は少年のことをそう呼んだ。少年はわからないと答えた。そして口にはしなかったがこう思っていた。庭木をいじっているじいちゃんを見ているのは好きだ。そして綺麗な庭も。

『ぼんは何になるのかな。大きくなったらな』

わからない。じいちゃんみたいになりたいけど、それは照れくさくて言えない。

少年の作業は大詰めを迎えていた。裾まできちんと刈り取り、少し離れた場所から凹凸がないかと観察する。祖父がこれを見たら、何と言うだろうか。良くやった、と褒めてくれるだろうか。

ステンレス製の熊手を引っ張り出してきて、地面に落ちた枝葉をがりがりと掻き集めた。アスファルトの照り返しで、日に焼けた頬がさらに火照り、目がちかちかする。真夏の昼下がりはすべてのものがぎらぎらと輝いて、影はあくまでも濃かった。麦わら帽子を被っている自分の影がひどく不恰好に揺れていた。そんな時だった。

蝉の声が一瞬、遠のいた。

『喉が渴いたろう、ぼん。サイダーでも買いに行くか』

はっとして、少年は振り向いた。

そこには誰もいなかった。通りの向こうで、陽炎が揺れていた。

……気のせいだろうか。

がちゃん、と玄関の扉が開いた。まろび出てきたのは母親だった。

片手には電話の子機を持ち、つかけたサンダルは左右で違っていた。

「じいちゃんが」母親は一度しゃくりあげて、続けた。「今、病院で……」

少年は、ぼんやりと生け垣を眺めていた。……今、病院で。

「何よこれ、あんた、一人でやってたの？」

少年は、ゆっくりと頷いた。綺麗に刈り揃えられた生け垣を見て、母親が驚きの声を上げるのにも構わず、再び熊手を動かし始めた。枝葉がなくなり、むなしく空を掻いても、ずっと。

『よくやった、ぼん。大したもんじゃないか……』

あるかなしかの風が、幻聴を押し流していった。知らず肩が震えたが、少年は泣くまいと思った。代わりに母が泣いてくれるから。さあもういいだろう、と少年は地面に向かって微笑んだ。片付けが終わるまでが仕事なんだぞ、と祖父の口調を真似ながら。

営業の仕事をしていると、珍奇な出来事に出合うことがまめである。これから書くのも、そのうちのひとつだ。

加山は閑静な住宅地を歩き回っていた。昼を過ぎた頃だ。学校は夏休みも終って、二学期が始まったばかり。表で遊ぶ子供も見かけない。いくらか空気がひんやりしてきたとはいえ、日の照りつける中を歩くのはこたえる。

同じ造りの住宅の並ぶところを行くと、家の前の石段に、ランドセルの少女が腰掛け、顔を皺くちやにして泣いている。

普通なら通り過ぎてしまっただが、このときに限って彼はそれができなかった。社の規程でも、少年少女に対しては、めったに声を掛けてはならないことになっている。最近とみに子供に対する犯罪が増えてきているため、怪しまれると社の信用にも係わるというものだった。

では、どうする場合なら、手を差し伸べてもよいのかというと、命にかかわるときに限るとなっている。命にかかわるかどうかは、一見ただけでは分らないが、スズメバチに刺されたとかで、すぐ手当てをしなければいけない場合もあるだろう。今は傷は小さくても、毒が全身に回って命を落とすことだってなきにしもあらずなのである。

加山は、そんな七面倒くさい規程などなかったことにして、少女に向き直ると、
「どうしたの」

その声を掛けた。少女は皺くちやの顔をさらに皺くちやにして上げると、

「犬が家に入っていて、咬みつくの」

と訴えた。少女が手にしているのは、どう見ても家の鍵である。

想像できるところは、その鍵をつかって家に入ったところ、犬に吠えかかられたらしい。

「どこの犬？」

当然この家の飼い犬とは思ったが、念のためそう訊いた。

「家のヨタカと、ほかの大きな犬が二匹」

「それはただ事じゃすまされん。家宅侵入罪のほかに、犬が人間の家を占拠という重大な問題がある」

彼は独り言のようにそう洩らすと、少女を促して、

「よし、ぼくがその悪い犬をやっつけてやるから、中の様子を見せて」

と言った。

少女は腰を上げて鍵穴に鍵を差し入れにかかる。何と犬が追っこないように、鍵までかけて、外に避難したと見える。何かが逆になつてゐる気がするが、そんなことをとやかく詮索しているときではない。

鍵をかちやかちやいわせているうちに、吠え声は厚い扉を通して聴こえてきた。扉を開けるやいなや、吠え声はいっせいに大きくなって、犬の姿が立ち塞がるように花開いた。いや鼻開いたというべきかもしれない。三匹の鼻がにゅーっと接近してきたのだ。なるほど二匹は大きな柴犬で、一匹は小さなコリー犬だ。コリーのヨタカを中心にして左右を柴犬が陣取り、三匹は一斉蜂起した。

唾を飛ばし、咬みつくばかりに首を伸ばしてきたので、加山は少女をかばっていったん外へ出て扉を閉める。

彼は家の横手に回って、武器となるものをさがしにかかる。塵集めに使用しているらしい火バサミを手にして、戻ってきた。少女は涙の跡もきれいに消えて、いまや闘志をみなぎらせていた。

背のランドセルが邪魔だが、下に置けば犬の格好の遊具になってしまう。そうかといって、外に置けば今度は人間の置き引きが心配だ。家も外も、安心してはいられなくなった。

大人の役目は、子供を庇護のもとにおいて、勇気を与えてやることだ。

加山は社の規程に睨みをきかせて、そう呟いた。それから見つめてきた火バサミをぱちぱち鳴らせてみる。

「これでよし」

と少女にとも、自分にともなく言った。

再び扉を開けて、犬に歯向かう。歯向かうという言葉がびつたりするほど、犬たちは口をあんぐりと開け、歯を剥き出して吠えかかる。彼は火バサミをぱちぱちとやる。犬の吠えない外ではけつこう響いたが、三匹の犬の狂騒の中では、まるで冴えないのだ。

犬たちは彼に力がないと見て、迫って首を伸ばしてきた。犬の目元から口にかけて、筋が出てびくびくしている。

少年の頃、こんな青筋を立てて、彼を怒鳴り散らしていた栗林の爺さんのことを思い出した。あのこめかみの辺りの青筋が、この吠えかかる犬の口から目元にかけてひくひく動く筋と、よく似ている気がした。

すると憎しみが湧き出てきて、犬と爺さんが重なってしまった。

爺さんはいつも、竹箒を振り回して加山を追い払っていたが、彼は今、火バサミでその復讐を遂げる気分になっていた。

青筋をひっぱたいてやるうとして、火バサミを突き出した。犬はちょうど口を開いたところだったので、火バサミは口の中にはいった。カチツと硬いものにぶつかって、火花のようなものが散った。犬はぎゃふんと唸って、後じさりし、そのままぎゃふぎゃふいいながら方向転換した。

他の二匹もそれにならって後ろ向きになり、裏口から出て行った。飼い犬のヨタカも後につづいて出て行った。裏木戸は丁度犬が通れるくらい開いていた。まず木戸を開ける要領を知っているヨタカが入って、それに二匹がつづいて、家を占拠したことは明らかだった。犬の去った家の中は、犬の足跡だらけになっている。

「家の人は？」

彼は急に不安になってそう訊いた。

「ママはね、パートで、ストレス解消のお仕事よ」

「ストレス解消のお仕事？　そういう仕事をしているのかい」

「そう、そういうお仕事」

「よく知ってるね、そんな難しい言葉を」

「ママの友達が来たとき、そう言ってたもん」

「パパは？」

「パパはね、北海道に単身赴任のご出張」

「そうか、そうか。それで犬は、この家を狙ったわけだ。あまく見たんだよ」

加山は言って、犬の歯が欠け落ちていないか床に視線を這わせた。カチツと硬いものに当たって光った気がしたので、うまくいけば、

星が見つかるかもしれないと思ったのだ。しかしそれらしきものは落ちていなかった。もつとも、金歯をした犬というのも聞いたことがなかった。

トイレの水を流す音がして、少女が鼻をつまんで戻ってきた。そうしてトイレの方角を指差している。彼女に促されて行ってみると、トイレのドアを少し外れて、犬が糞の置き土産をしていた。

犬の撃退に着手してしまつた以上、これもそのうちの一つかと、少女にビニール袋とティッシュペーパーを持ってくるように言った。少女は言われたとおり、一枚のビニール袋とティッシュペーパーのボックスを持ってきた。

彼はティッシュを五、六枚引き抜き、重ねてビニール袋の中に敷いた。それをビニール袋の外から手に持ち、糞に被せてすくい取つた。次にそれを中身だけトイレに流して、ビニール袋はプラスチック類の塵箱へ入れた。

これでよし。彼はおいとましようとして、家の中を見回す。犬の足跡だらけ。糞の跡もあのままでは、非衛生的だ。

「ママがパートから帰ってくるのはいつ？」

「今日はさー、水曜日でしょう」

少女は指を折り曲げたりしてもどかしい。「水曜日だから……一時半」

一時半ならもうすぐだ。ぐずぐずしていると、こちらが犬にされてしまう。

「よし、雑巾とバケツを持って来い」

彼は命令しておいて、自分の靴を玄関から裏口へ運んだ。ママが帰って、鍵をカチャカチャいわせたら、さつと裏口へ走っておさら

ばする寸法だ。

彼は少女の運んできたバケツに水を入れ、雑巾を濡らして拭き掃除をはじめ。少女ももう一つ雑巾をみつけてきて、彼と並んで拭きはじめる。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「お掃除すんだら、私と一緒にママの働いてるスーパーに行ってみない」

「いやだよ。それどころじゃないんだ。お兄さんが来たなんて言っちゃ駄目だぞ。もう犬が入った証拠なんかひとつも残ってないんだ。だから、お兄さんが犬にされちゃうんだよ。こうなったら、犬の糞の後始末なんかするべきじゃなかったよ」

彼は糞のあつた辺りを入念に拭き清めながら、そう言った。その彼の肩に手をかけて、

「お兄ちゃん泣かないで。私がお兄ちゃんの偉いところを、ちゃんと説明するからね。証拠だつてあるもんね」

「何があるんだ」

「糞をつまんだビニール袋」

彼は逆に不安になつてきた。あんなものを残して行って、間違つて食べ物を入れられたりしたら、大事だ。彼は自分の部屋とこの家と、家庭を二つ持っているような気になつて、心が痛んだ。

彼はさっきのビニール袋を塵箱から取り出すと、裏口へ走つた。このとき玄関の扉がカチツとなった気がしたのだ。追いかけてくる少女に、

「何もなかったことにするんだよ。犬も来なかったし、お兄ちゃん

も来なかった。でも、この裏口も戸締りをしないとね」

加山が外に出ると、少女はわつと泣き出した。さつき玄関で泣いていたときより、もっと皺くちな顔になつて、号泣した。彼はその声を背にして、犯罪者のように走つた。俺はどうして、少女を泣かせる達人になつてしまったのだろう。そんな悲しみを抱えて走つていった。

了

17 優愛ドラマ

ロック魂

ばあちゃんが死んで、家の灯は消えてしまったみたいだった。

中学から帰ると馴染んだ家は静かで、妙に広く感じて落ち着かない。きつと表の店にいるじいちゃんも同じなんだ。薄暗い部屋に付け放しのテレビは、たぶん消し忘れじゃない。

でもテレビじゃ誤魔化せない。無意識にはあちゃんを探し空の座布団に、静かな台所に、思い知らされる。

人は、いなくなつてしまふんだ。

「カレー作るぞ！」

馬鹿でかい声とともにガラスと戸が開いたとき僕は制服のまま居間に突っ立っていた。

ぎよっとして振り向くと、店と居間を繋ぐ出入り口には玉葱や人参の詰め込まれた袋を抱えた色黒オヤジ。眉の太い濃い顔はきれいに髭を剃ってるのに、うねうね肩まで伸びたワカメみたいな髪のせいで清潔感台無しだった。

啞然としているじいちゃんを背に、そいつは遠慮なく家へ上がり込み騒ぎ出した。

「んな暗いところでなーにポケットとしてんだ？ カレー作るぞカレー！ 手伝え優太！」

この変な頭のオヤジ、たまにしか帰ってこないけど真正銘僕の親父。

口の中で崩れる柔らかい豚肉に、さらりとしたスパイスの効いた辛めのルー。炬燵に3人向かい合って食べたカレーライス。

「美味いか？」

親父がにやりと何か企む悪人みたいに笑って聞いてきた。なまじ目付きが悪い親父は笑うときも妙に目に力があるもんだから絶対『にこり』にならない。

鼻水が出そうになって慌てて俯いて頷いた。こんなの反則だ。いつも帰ってこないくせに、どうして親父にはあちゃんと同じカレーが作れるんだよ。

横から具が大きすぎると文句を付けたじいちゃんに、親父はそれ

ががいいんだと返す。いつも通り交わされるやりとり、僕は顔を上げられずただ必死にスプーンを動かした。今から、3年前のこと。

僕の親父はドラマーだ。もう四十も後半だというのに本気でドラム一筋、ひたすら上を目指し日々ロックバンドでドラムを叩いている。それはもう、僕が生まれる前からずっと。

「じいちゃんて親父のドラム聞いたことある？」

土曜の昼、御飯を食べながら聞いてみた。じいちゃんは焼き鮭を食べる箸を止め、老眼鏡の奥の目に明らかに警戒の色を浮かべ僕を見た。

「優太、お前ロックだかバンドだかに興味あるのか？」

「そうじゃないけど」

きりぼし大根をつつきながら答える。

「親父いつも俺はドラムの達人だとか言ってるし、そんなにすごいのかなと思って」

大根は少し固くて味が濃過ぎた。3年前から料理は僕の担当だけど、やっぱりあちゃんの味にはまだまだ及ばない。

眉間の皺を深くし皿に目を戻したじいちゃんの表情は苦しい。

「優太にいらん苦労させてどの口が達人なぞ言つか？」

うちには母親がいない。親父と母さんはライブが縁で出会ったらしいが、僕が小さいときやっぱり親父のドラム熱が原因で別れた。

現実には甘くない。ライブチケットの売り上げも微々たるもの、練習や器材の整備にだって金が掛かる。親父の稼ぎなんて無きに等し

いのだ。正直僕は親父がそれでどうやって生活してるのか分からない。い。

じいちゃんばあちゃんに育ててもらった自分が苦労してるとも思わないけど、子供を親に預けたまま家にも帰ってこない親父はあまり褒められたものじゃない。

そう、思ってたんだけど。

「それが親父本当に達人って呼ばれてるみたいなんだよ」

昨日の朝教室に入るなり佐々木に話しかけられた。曰く。

「吉原の父さんで格好いいな！」

……。彼は前の晩、親父のバンドが出てるライブを見たのだそうだ。自身もドラムを囓っている佐々木は興奮した様子で更にこう言った。

「さすが神保町のドラムの達人だよ！」

友達にいきなり親の話されたからってのもあるけど、結構衝撃だった。いつもじいちゃんに小言を言われてるダメ親父のイメージがぐらついた。

けどじいちゃんは表情ひとつ変えなかった。

「人の役に立って、技を活かしてこそその達人だろう。どれだけ太鼓が上手かろうが、それで周りに迷惑かけるやつを達人とは呼ばん」

言い切って鮭と一緒に残りの米を掻き込む。丁度店の方から声が出て、じいちゃんはご馳走さんと手を合わすと下駄をつつ掛け店に出た。

戸を一枚隔てて話し声が聞こえてくる。

「吉原さんこの前頼んだの、直りましたか」

うちは文房具店で、万年筆を扱っている。たぶんこの客もじいちゃんにペン先の調整を頼んでたんだらう。

大事に使われた万年筆は一目で持ち主の書き癖まで分かるらしい。じいちゃんを使う人に合わせてペン先を調整する。

「できてますよ、これでどうですかいね」

じいちゃんの声の後、客の明るい声が出た。

「すぐ書きやすくなりましたよ、ありがとうございます。これ、妻から貰った物なんです」

むしろじいちゃんのほうが達人だ。

けど珍しく興奮した佐々木の顔がもやもや頭にちらつく。まあいいや、今度親父が来たらライブの予定聞いてみよう。そう軽く考えた。

でも僕は分かってなかった。3年前思い知ったはずなのに。親父がいなくなることなんて、全然考えてなかったんだ。

学校が終わった足で病院へ向かう。

昨日の夜、親父が入院したと電話をくれたのは近所のスーパーで働くおばちゃんだった。詳しくは分からないが、肝臓が悪いみたいだと。

何でおばちゃんか？

そんな疑問は次の瞬間どこかへ飛んだ。

『手術が必要らしい』

肝臓。親父は結構酒好きだ。体に悪いとかじいちゃんに言われてた。でも手術するくらい悪いって……。

電話の内容を聞いたじいちゃんは一言「そうか」とだけ。振り返らない丸い背中が、ひどく小さく見えた。

僕を根っここのところで世界に繋げてくれているのは、じいちゃん、親父。でもそれはひどく脆く、崩れそうなのかもしれない。

気持ちは重いのに、ビルの谷間の歩道は早く進めと背中を押してくる追い風。通り掛かり自販機の脇のゴミ箱に引掛かり揺れていたビニール袋が、一際強い風には、と煽られ次の瞬間宙に流れた。その行方を見る前に僕は足元に視線を落とした。

「何だ優太、来てくれたのか」

6台ベッドが並んだ白い病室。その一つに親父が寝てるって妙な感じがする。

「これ、お見舞い」

「おっ悪いな。何だりんごかよ。そこ置いとてくれ。あ、ついでにこれも」

相変わらず大きな声に少しほっとする。親父の見ていた雑誌と買ってきたりんごをベッド横の棚に置いて椅子に座ると、親父はばつが悪そうに笑った。

「悪いな寝たまま。起きるのしんどくてよ」

具合どうなの。聞こうと思ってた言葉が喉の奥で固まった。親父

は気付かず続ける。

「年には勝てねえなあ。けど一日中寝てんのも飽きるぞ。あ、ドラム叩きてえ」

布団の上で指がとんとんとリズムを取る。こんなときでもドラムの話。考えてみると親父の人生は呆れる程ドラム中心だ。

「親父って何でそんなドラムに熱いの」

ぼろりとでた疑問はけどずっと聞きたかった質問だった。親父は何故か変な顔をする。

「お前、俺があれだけドラムの素晴らしさを教えてやったのに……今さら聞くか」

「何それいつの話だよ。全然覚えてない」

僕の返事に親父はわざとらしく溜め息をつき、表情を改めると聞いてきた。

「音つつうのは空気の振動だろう。人の身体で振動が一番伝わるのはどこだ？」

何でそんな話になるんだ。でも一応素直に考えてみる。

「えーと、鼓膜？」

親父は何故か「かあつ」と奇声を発して頭を振った。

「そんなちつせえ話してんじゃねえよ」
いちいちリアクション大きいよ。

「じゃあどこだよ」

聞くと親指を立て自分の胸を差し、にやりと笑った。

「ここだよ」

……胸？

「振動つてのは骨とか筋とか硬いもんより水によく伝わるもんだろ

「うっ？」

「まあそっ……だね」

親父は澀みない口調で続ける。

「水に近いものたら血だ。そして心臓には血が詰まってる。つまり振動が一番伝わるのは心臓だ。だからドラムの音は胸に響くのさ」

親父は今度は僕の胸を指差し、自信に満ちた顔で言い放った。

「俺はまさにドラムで人の心を震わせてんだよ」

「……ふうん、誰かの受け売り？」

「世界の常識だよ」

嬉しそうに親父は笑った。何だか胸の辺りがすずすずする。

「……じいちゃんが、どんだけドラムが上手くても周りに迷惑かけて活かせてなかったら、達人じゃないって言うてたよ」

どうしてこんなときなのに、素直に格好いいと言えないんだろ
う。

「何言ってるんだ？」

きょとんとした親父から目を逸らした。

そうだよ親父はドラムで人の心を震わせて、感動させてる。それはきつと活かせてるってことだ。ただそこに僕の入る余地がないっ
ただけで。

「活かせてるだろ？」

分かってるよ。視界の端で親父が僕を見てにやりと笑った。

「お前がいるじゃねえか。それで迷惑なんざ帳消しよ」

『親父と母さんはライブが縁で……』

思わず振り返るといつもの悪人スマイル。真っ直ぐぶつかった目が、僕の心の中なんてお見通しだと言わんばかりに笑っていた。

続けて「まあオレは誰にも迷惑かけたことないがな」なんて惚けるから僕はやっと「何言ってるのさ」と言っ立ち上がった。

「夕飯の準備あるから帰るよ」

返事も聞かず病室を出て足早に歩く。

胸の奥が熱くて、何だか泣きたいのに笑いだしたい。また調子いいこと言ってるだけかもしれない。けど、親父の人生の中に少しは僕もいたんだ。

現状なんて何も変わってないのに病室に来るまで感じてた不安はどこかに消えていて。僕は制服の袖で顔を拭うと前を向いた。

親父のドラムを聴けなかったのが、ちょっと残念だなと思った。

ついでに親父は2週間後退院した。入院の理由はぎっくり腰だったらしい。家に帰って来た親父は、まだ無理するなって言われてるのに早速バンドの練習に出かけた。ありえない。じいちゃんはまたけしからんとか言っただけどちよっと嬉しそうだった。

もう殺したって死なない気がする。親父はやっぱり極悪人なのか
もしれない。

立川優尋

—

「ほんまに、やるんか……？」

古びた喫茶店の薄暗い照明の下で、誰に問いかけるともなく、確認した。

汚れきった空気に重なるように吐き出したセブンスターのけだるい煙を断ち切るように、吉野が言った。

「何この期に及んで迷うとるんや。もう行く道、来とるんやで。腹、くくらんかい」

そつだ。もう、引き返しの出来ないところまできているのだ。

吉野が大阪市街地図に赤マジックで点と線を書き込みながら、作戦計画を説明する。

テーブルの上はこぼれたコーヒーと染みだらけの紙ナプキン、山盛りの吸殻を乗せた灰皿。雑然とした中に描かれる作戦計画。まさに俺たちにふさわしい戦争前夜の様相を演出してくれていた。

最後の西成暴動から16年。

俺は暴動の匂いをかぎつけて神戸から駆けつけた。最高指揮官の吉野が描く作戦計画に、乗ることを即答で了解してしまった。

「あとの一般兵士は日本橋に集結してから電気屋のトラックの荷台

に載って合流。市更相前で一斉に飛び降りる」

俺は、神戸からの部隊一つを率いる指揮官の地位を吉野から与えられている。

「一般兵士より先にやらせてくれるんやろ？ 火炎瓶も」

「せや。神戸、和歌山、横浜、仙台、名古屋が突入や」

俺は和歌山も横浜も、どこも指揮官の名を知らない。連絡先も知らない。誰が見方のかすら、その場に行かないと判らない。すべては吉野に預けるしかない。それが、吉野が言うには、身を守るため、なのだそつだ。

「ええか、今回の戦争は長期戦や。部隊がパクられたり負傷して撤収しても、その晩には残存部隊から戦闘部隊を再編成して翌日に備える。そのために、芋づる式にパクられるワケにはいかない。それで、翌日、翌々日、と歴史を塗り替えるんや！」

俺の言葉をさえぎるように吉野が言った言葉。

「神戸には中核部隊を担ってもらう。間違いないように頼むで」

俺は吉野が発する言葉の炸薬に、酔いしれた。

大阪市西成区の生活保護受給で、特定の宗教団体との間に不正があったこと。それに抗議した釜ヶ崎の住人が西成警察に実力で排除され、軽く乱闘となったこと。

前哨戦は既におきていた。西成の、通称「釜ヶ崎」にはさまざまな意図を持った団体が跋扈している。純粹に炊き出しや医療支援をする団体。キリスト教団体。その他宗教団体。新左翼。同和団体。新右翼。

俺には、詳しいことは判らないし、判るうとも思わない。

ただ、平成二十年の日本に、戦場が出現したことに、はせ参じただけの自称兵士だ。

戦闘服を身にまとい、電動エアガンを持って自衛隊ながらの戦闘を野山で繰り広げてきた、サバイバルゲーマーに過ぎない。俺にとっては、本物の戦場が存在すること、それだけが意味だ。

俺は、神戸でサブゲーチームを組織していたので、いつしよに参加した何人かと、他に同じく神戸からきたゲーマーを指揮する「神戸第2部隊」指揮官を任じられている。

他に、リアルでの格闘をやりたい格闘家、爆発物マニアなんかは部隊を構成しているらしい。

「免許や保険証はもちろん、身元につながるものは一切もつていくな。貰った場所が特定されるポケットティッシュもや」

ただ、俺たちは電動エアガンの使用を禁じられたのが、不満だった。

二

雑多なだけの街路風景しかない。

小便可さい自動販売機。ダンボールの中でカップ酒をあおるオッサン。金髪の中学生。走り抜けるねずみ。放し飼いの犬。路上で煮炊きする人。露店。ブルーシート。

その「釜ヶ崎」の一角に通称「市更相」こと大阪市立更正相談所

がある。

「予算が足らんいうて福祉よう受けられんのになんで奴らにはナンボでも出すんや」

「申し入れの回答、せんかい！」

「業務の妨害をしないでください」「当所に質問されても答えかねます」と大声を張り上げる職員。

「更正の相談するところやろツ！ 福祉が使われへんのも問題ちゃうんか」と突っ込むオッサンの群れ。「ええかげんなことぬかすなツ！ 大阪市には違わんやろツ」職員につかみかかり、警官に引きずり倒される汚れた作業服。

おそらくどこかの現場で支給されたものであろう、土建業者のネーム入りのジャンパーに制服警官の安全靴がのめりこむ「午前10時8分、公務執行妨害で検挙！」

「こら、ポケー」口は出しても手え出すなゆうたやないか！ ドアホ！ ポリコの思うつぼやで！」指揮者が叫ぶ。興奮した群衆の中から、モノが飛ぶ。酒瓶の割れる音。群衆の中には吉野が指示したレポ（偵察）が混ざっている。携帯で逐一、状況が伝えられているのだろう。

ジーパンの尻のポケットに入れておいた携帯がブルブルと震える。指揮官以外、携帯は持っていない。そして、その携帯も、吉野から渡されたトバシ携帯だ。

“Undisclosed Recipient”

「広島第1、神戸第2、横浜第1、京都第4、名古屋第3、兵士第1班」第5班とともに 市更相に突入」

戦闘の幕は、酒瓶の割れる音と、トバシ携帯のバイブによって切っておろされた。

三

あるものはカジュアルで、あるものは労務者風に。

統一感のないわが軍が、いつせいに住所不定の労務者の群れに合流した。

先陣を切ったのは、名古屋の部隊の指揮官だった。

「名古屋第三、突撃！」

石が、空き瓶が、爆竹がどつと舞った。

神戸第2も負けじとさまざまなモノをなげる。格闘家部隊もいるのだらう。市職員や警官が投げ飛ばされ、正拳突きに倒れる。

市職員と警官の列が乱れる。逃げ出す市職員。

大きなカゴを積んだ原付バイク。どうせ盗難車なのだらう。カゴの中には空き瓶や砕いたコンクリート。積荷を降ろしたらその場に放棄されるバイク。石が命中し、額から血を流す市職員。

労務者と「わが軍」のけが人を助けるものはいない。警官・市職員のけが人は手際よく保護される。そのことにヒートアップする労務者。

すぐに西成署から応援が来る。

いったん退却し、各所に隠しておいた投擲物を用意する。

西成警察署に向かう路地には既に警察官の群れと、労務者と「わ

が軍」の群れが白兵戦を演じている。ひっくり返されるリヤカー。投げ捨てられたバイクから流れ出したガソリンに火がつけられ、炎上する。

面白いもので、いかにもマッチョな男が臆し、ヒョロヒョロの、しかし怒りに打ち震えた高齢の労務者が炎の中に突進する。

路上に放置されている廃車の中に隠してあったビールケースが出される。中には、ビール瓶で作った火炎瓶。

早速、投げつける。モノをなげるのはサバイバルゲームで培った「ハンドグレネード」で慣れているはず。

飛んだ。

放物線を描き、警官の群れの中に飛び込む火炎瓶。

放水と消火器と火炎瓶。投石。空き瓶。何故か、機械部品も飛ぶ。

路上に積んであった袋詰めアルミ缶が破れ、空き缶だらけになる。

足元には、消火剤と水と流れたガソリン。ガラス片。

もう一本、投げる。今度は情けなく、全然飛ばないで、手前のほうに炎の壁を作る。

なぜだ？ あわてて毛一本投げる。いつの間にか、軍手をなくし、右手が素手になってきたことに気づく。手が熱さと油で浮ついてうまく瓶がもてない。地面に落としてしまう。幸い、割れていない。

「こつやるんや！」

薄汚れたジャンパーに、作業服の老人が投げた。

綺麗な放物線を描いて、警官のご真ん中に黒煙を上げた。

四

「ネットで『戦友』募集？ ネット世代のバーチャル戦士」

「ワシらの怒りを遊びにするな！ 怒りのあいらん地区」

新聞、雑誌には「わが軍」を非難する記事が踊り、ニユース番組ではしたり顔のコメンテーターが判ったような判らないような「分析」を述べた。

「吉野」こと長谷川は検挙され、「指揮官」たちも次々と検挙された。

俺は公務執行妨害、器物損壊、傷害で起訴され、懲役1年、執行猶予3年の判決を受けた。

勤めていた運送会社を解雇され、親からは勘当され、ネカフエ難民として神戸・大阪を渡り歩いた末、俺は大阪市西成区萩之茶屋の簡易宿泊所、つまり釜ヶ崎のドヤに暮らすようになった。

午前4時。既におきてその日の仕事を手配されに「労働センター」行く。日雇い人夫が一人。

仕事にありつけず、とりあえず「アブレ」こと日雇労働者失業保険を受給して三角公園（萩之茶屋南公園）に立ち寄った。「アブレ」は、日雇いの仕事にありつけなかったときに得られる給付金。日雇いの仕事をすると、一日一枚の印紙を貼ってもらえる。2ヶ月で28枚の印紙を貼ると、3ヶ月目から「アブレ」がもらえる。1日分が6,200

円。最高で3日分までしか得られないが、貴重な収入源のひとつだ。

紙パツクの合成酒を飲みながら、ぼんやりしていると、隣に薄汚れた年老いた男が座った。

「兄ちゃん、ちよっと前から見かけるけど、だいぶ日雇い人夫らしくうなつてきたなあ」

余計なお世話だ。

「はあ……そうでツか……」

「この暮らしもなあ、慣れるとええもんやで」

慣れたくないけど、慣れなしゃーないからそつしとるだけだ。

「はあ……そうでツか……」

「ワシもな、若い頃は……今でゆうなんや、過激派で派手にやつったで。関西フロントでな、東京も応援にいったんや。安田講堂も三里塚もやつたで。それで就職も決まらんさかいに、ここに来たんや。兄ちゃんもいつしよやな」

何を言ってるんだ、このジジイ。

「はあ？ 何ゆうとんねん、おっちゃん」

「とほけてもあかん。あんとき、なれない手つきで投げとつたる。

火炎瓶。あれな、コツがあんねんで。遠心力や。瓶の口のほうをこう持ってな、遠心力で全身で投げるんや」

ジジイは薄汚れた眼鏡をずり上げながら、興奮気味に酒瓶を振り回しだした。

「ワシはなんでもええんや。あの時代はあれが祭りやったんやな。兄ちゃんといっしょや。ウヒヤヒヤ」

俺の、40年後が、見えた。

19 春楔しゅんけい

近江美子

駅から歩いて向かうところで大雨に出くわした。

「どうぞ、お入りになってご覧下さい」

慌てて軒を借りたところはギャラリだった。

「いや、お構いなく」

少し失敗したな、と頭を掻く。

「そんな絵がなんぼのもんじゃいつ」

放り投げたグラスが足元で割れても、振り向くことがなかった父。

その名前がポスターに連ねてあったのだ。

そのまま、勘当同然に家を出て5年。

母とは連絡をとってはいるが。

「どうぞ、お茶も入りましたんで」

さっきの女性が、また声をかけてきた。

「お寒いでしょう、ご遠慮なさらずに。別に売りつけたりしませんから」

にっこり笑う。

根負け。

苦笑いして、開け放たれたドアをくぐった。

思ったより広い店内は、迷路のようにパネルで区切られていた。記名帳の横に応接セット。

「どうぞ、お座りになって下さいな」

日本茶が出される。

「実は、今日初めてのお客様なんですよ。この雨でしょう。ゆっくりして行って下さいね」

思った以上に気さくな彼女に話が弾んだ。

バイトの帰りなこと。

社員に負けない位こなしている自分の仕事ぶりのこと。

「しっかり頑張ってるんですね」

「ええ、バイトの達人ですから」

ほら、親父に聞こえても大丈夫だ。

俺はちゃんとやってる。

見る人が見れば判るんだ。

作品を観てまわろうとする時にはもう何の抵抗もなかった。

ふんふんと判った気になって、次々と水墨画を眺めた。

一番奥に親父の作品があった。

あの時丸まっていた背中を思つと、胸が少し痛んだ。

ちょうどその時、

「あつ、龍春先生がお見えになりましたよ」
彼女の声が出た。
親父だ。

「先生、今お客様が見えてますのよ」
「おお、そうですか」

確認するかのように、中を覗き込む。
慌てて隠れるようにした先に、その絵があった。
登る龍。

それは、天空ではなく、岩場を駆け上っていた。
炎を上げているのか。
血を流しているのか。
朱い蒸気を吹き出しながら。

「ああ…よく来たね」
背後から声が出た。

俺は、親父の背中が年老いて丸くなっていることを期待していた。
一人息子を失って、意気消沈している姿を想像していた。
甘かった。

紺の着物を着こなした彼は、威風堂々としていた。

「傘を借りて帰りなさい」

穏やかな口調。

俺は一礼して、そのまま店をでた。
いい気になってた自分が恥ずかしかった。
びしょ濡れになるのを構わず走った。

20歳の春のことだった。

20 細腕繁盛不思議の国のアリス

真坂アリス

ものみな言でうはつのは黄金色なる屋下がり姉の読む細腕繁盛記
(花登筐)を退屈だなあと聞きながら、いつものようにトリップし
た。見渡す限り白い銭の花の咲き香る野原を、吹く風に髪をなびか
せてドレミの歌をうたいながら、それは気持ちよく下るうち、いつ
ものように落ちた。落ちた先の売店で見覚えのある羊から毛糸玉を
二つ買ったらおまけに子羊が付いてきた。可愛いんだけど、子羊を
抱いて歩いたことなんてなかったからすぐに疲れて捨てたくなった。
「買った品物より大きなおまけなんて最低」
「そういうがね、あんたアタシをずっと育てていれば生涯毛糸に困
ることない。って頭働かないのかね？」

「んまあ、あんた言葉話せる子羊なのね？驚いた。でも、毛糸に困らないって、人生でどの位重要なのか、私にはわからない」

「欲がないねえ」

「よくいわれるわ」

「下手なシヤレかい？つまないね。じゃ、アタシ行くね」

ええっ？ 私の子羊じゃなかったの？ 全く教養がない、礼儀つてものを誰からも教わらなかったの？ 最も子羊に教養なんて求めたつて虚しいわ、ここは、哀れむべきところね。

明るいお庭に今日こそ行けるかしら？ 何のためにそこにいくのか今は思い出せないけど、行けばきつと思ひ出す。世の中とは決まってるのよ、学校では教えてくれない事を経験から学んで生きていく子供もここにいてるってね。ふふん、今日はいい事いうわね、冴えてるんだわ私、かなり自慢。あらら、大きくなってきた。

「んまあ、つ、あんた大きななりして自分のこと、子供って言った？嘘つきねえ、嘘つきだわよあ」

「言っでないわよ、見ればわかるでしょ？ 大人よ私」

「言ったわ、言っただじゃなく、私みたいな子供だなんて」

うるさい鳩ね、頭にくる

「大人だつて子供だつていいじゃない？大蛇だつて言った訳じゃないんだからガタガタ言われる筋ないわ」

「んまあ、へえびつて言っただね、許せない。しかも大蛇だとあ」

鳩のあまりの剣幕に、食べ物じゃないと知ってはいるけど、毛糸玉をかじってみた。あたりまえに純毛の味がして、縮んだ。ほっ、うるさい鳩から逃れるには縮むのが一番
「招待状をお届けして帰るでござる」

うわっカエルの執事。

「お受け取りただけると幸いでござる」

受けとったとたんに飛んだ先のクローケー場で

「ほどけた毛糸を球にするのがお前の仕事だろっ？」

「って、そうなんだっけ？ とおもうけど、女王からそういわれて反論出来ようはずもなく。ぐじゃぐじゃ毛糸にこんぐらがつて、目覚めは今日も最悪な気分。」

「蟻巣先生の夢、いつも素敵ですね。おトイレと違って戸を開けると、そこは押入れだったり、脱衣所で下着に手をかけたたん、そこはトラックの荷台だったり、そんな夢ごらんになったりしないのね先生は」

「ええ、決して」

「蟻巣先生のような文学的に優れた夢を私も見たいと夢みているけど、いったいどうしたらいいのかしら？」

「それは厳しい修行をいたしましたの」

「まあ、どちらで？ どのような？」

「お教えしましょうか？ 有料で」

「出来れば無料で」

「ほほほ、おあつかましくてらっしゃる」

「まあ、どちらがおあつかましくてらっしゃるか」

「なんとおっしゃる宇佐木さん」

「そんならお前と夢比べ」

「おほほ、その手にはのりませんわ」

「どの手に？」

「うふふ、この手さ」

きやゝつ。憧れの蟻巣先生の可愛いお顔がみるみる緑色の蛇娘（梅
図さん作）みたいに鱗になって金色に光る目、しかも蛇なのに手は
あるのね、怖い。

という夢を見ました。

「宇佐木さん腕を上げましたね」

「ありがとうございます。先生からそう言っていただけで、うれし
いです」

「もつと褒めて差し上げてもよろしくてよ、有料で」

「ほほほ、それにはおよびません。うんざりですよ、いちいち有
料。だいたい蟻巣英国式優良睡眠クラブから認定された夢の達人認
定証なんて社会的には何の役にもたないってことくらいいくらお
人よしの私でもそろそろ気がついていきますよ」

「まあ、おっしゃいますこと」

「ええ、言わせていただくわ」

「どうぞどうぞ」

「参りました」

「あら、もう降参ですか？ 口ほどにも無い宇佐木さんだこと」

「夢の中では負けておけ。夢修行の基本のキですわ」

「ほほほ、さすが優等生」

「ほほほ、先生直伝でございます」

「ほほほ、さすがアタクシ」

アタクシの「ほほほ」が金色に輝いて部屋中にあふれ、宇佐木さん
の「ほほほ」が黄色の影となってアタクシの金色の「ほほほ」を縁
取る。「ほほほ」に満ちた世界は美しく虚しい。

素敵な夢から目覚めた朝は生きる勇氣に満ちている

素敵な夢から目覚めた朝の世界は無限の可能性

素敵な夢を見るために素敵な眠りを眠りましょう

深すぎず浅すぎず長すぎず短すぎない

適度が大事適切は素敵テキストは危険適当が素敵

以下3万字略

略のまま了。

「困りましたね、なんですかこれ」

「ええ、深刻です。蟻巣先生の夢ではもうスクール運営は難しい」

「しかし、銭の花は白いそしてつぼみは血のにじむように赤い。ん
でしたよね確か、とするとこの黄色の暗示するものは金運と言える
のではないのでしょうか」

「新進気鋭の夢分析、フロイトかぶれな所見ときたまんだね」

「へっ？ フ、フロイトをばかになさるとは心外です」

「分析はうんざりなんだ直感的に、蟻巣を一度目覚めさせよう」

「へっ？ そこまで科学を抜きにしては危険です。賛同できません」

「じゃあ聞くんが、クライアントは誰なんだい、君かい？ 僕かい？」

「わかりません、個人というよりもっと大きな何かを対象と思われ
ます」

「科学以前の問題だな」

「おっしゃるとおり神話に近い」

「だからさ、それっ、蟻巣、蟻巣、おきろ蟻巣」

誰かが夢から覚めるとき無限の世界が一つ閉じる（一般）

夢から覚めても次の眠りでその夢を続けられる（名人）

寝ても覚めても変らず夢のまま生活できる（達人）

蟻巣英国式優良睡眠クラブで夢の達人を目指しませんか（有料）

夢を見るのが大好きな方お電話お待ちしています（相談無料）